ライフサポートファイルにおける　緊急時・災害時の備えや支援の必要性について

　阪神淡路大震災の記録を、当時の兵庫県障害児教育諸学校長会が、５００ページにわたってまとめています。そこから一部引用します。

　「この兵庫県に、平成７年１月１７日午前５時４６分、神のいたずらにより、震度７という直下型の地震が発生し、特に摂津（阪神）、淡路が壊滅的な被害にみまわれました。（中略）地震に対する災害に、よそごとのように何ら備えていなかったことは反省すべきだと思います。（中略）これが授業中であったらどうであっただろうか。通勤通学時であれば、亡くなった人の数はもっと増えていたに違いないし、行方不明者は膨大な数になったに違いありません。大震災の悲しみを癒すことはできませんが、発生が５時４６分というのはせめてもの救いであったかも知れません。」

　東日本大震災の発生は、午後２時４６分で、多くの特別支援学校は下校時と重なりました。学校の授業時間は、１年間で約１０００時間です。残りの約７７６０時間は、家庭や地域で過ごしています。すべての生活時間において、災害時の備えがされることを願います。

　また、阪神淡路大震災の記録として、ある教頭先生が次のように書き残しています。

　「私の知り合いの障害児とその家族は、震災で被災し、燃え盛る猛火の中を半壊した家から脱出しました。すぐ近くの小学校の避難所にいきましたが、すでに避難者でいっぱいでした。ひとつだけあった車椅子用のトイレは使用不能で、校庭の隅で用をたしました。やっと届いた配給のおむすびは、（中略）「車の中に障害の重い子どもがいる」と訴えても、「その子を連れてこい」という冷たい対応。「このままではわが子は殺される」と思った両親は、渋滞の中、車を走らせ移動を（中略）障害者や高齢者のための施設が、「今日は休館日です」という信じられない対応。（中略）避難所を探して、やっとのことで落ち着きましたが、暖房の効かない体育館で不自由な避難生活を続けるうちに、障害の重い子どもは肺炎にかかり（中略）障害のある子どもたちとその家族が、日常的に地域の子どもたちや地域の大人たちと交流し、人間関係が形成されている必要があります。」

　熊本地震の発生後、放課後等デイサービス施設や特別支援学校を訪問させていただきましたが、同じような課題が繰り返されており、『日常的な地域の子どもたちや地域の大人たちの交流』は、全国的に加速させ、共生社会の形成を一刻も早く実現させる必要があると強く感じました。

　福祉で作成されるサービス等利用計画や学校で作成される個別の教育支援計画が、ライフサポートファイルによってつながり、緊急時や災害時の対応について共有され、安全で安心な生活につながることを願っています。

防災教育チャレンジプラン（内閣府）実行委員
千葉県立長生特別支援学校　前教頭　　瀧川　猛